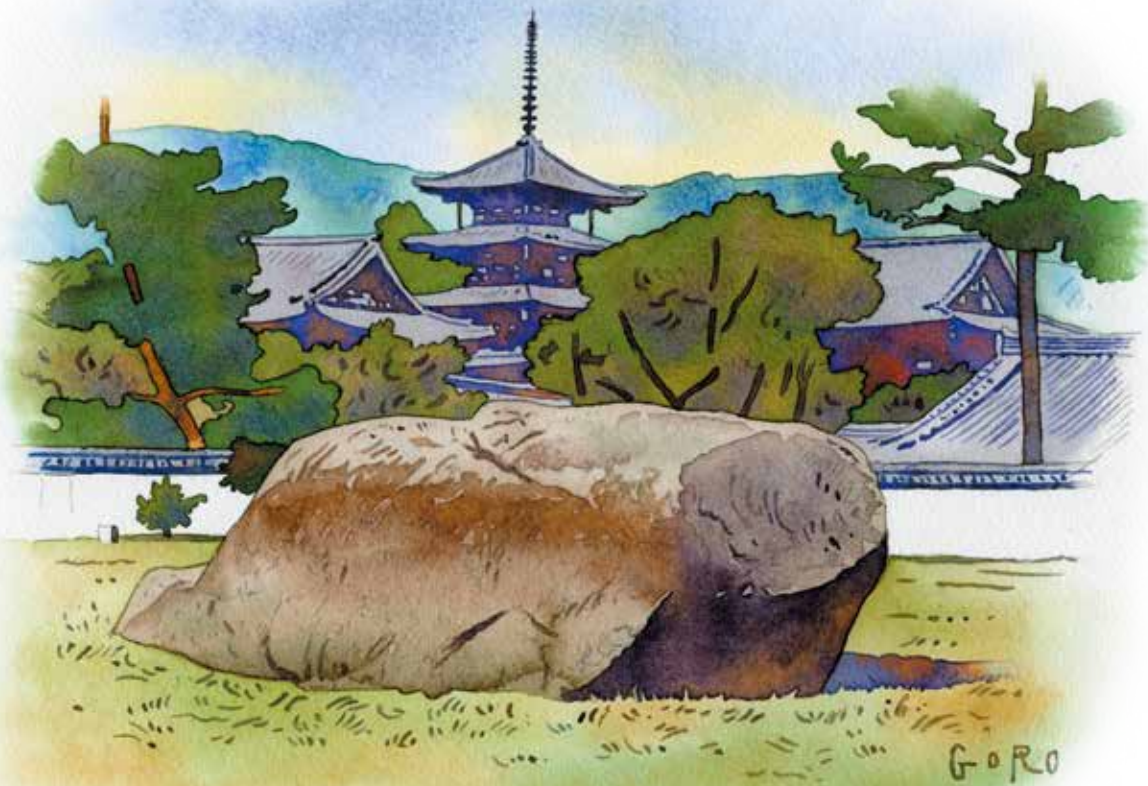


第5回 若草伽藍（法隆寺）



若草伽藍の礎石

古墳時代（前方後円墳の時代）は3世紀後半から4世紀に始まり、6世紀末にほぼ終焉している。王権が入れ替わったわけではないが、権威の象徴である前方後円墳に代わって仏教寺院が出現した。掘立柱に板葺き（あるいは茅葺き）の建造物が、礎石と瓦を備えた最先端のきらびやかな姿で登場し、人々を驚かせたのだ。日本で最初の本格的寺院は法興寺（飛鳥寺）で、続いて斑鳩に法隆寺が建てられた。

ただし法隆寺は、7世紀前半に全焼してしまったと『日本書紀』は記録している。ここに謎があって、なぜか法隆寺の僧たちは、近年まで「いやいや燃えていない」と言い張ってきた（謎めく法隆寺）。そのため、「法

隆寺再建・非再建論争」が勃発したが、若草伽藍（創建法隆寺）が発掘され、再建されていたことがはっきりした。

あまり知られていないが、若草伽藍の塔は、王家が重視した霊山・大和三山の天香具山と耳成山を結んだライン上に位置する。古代人は現代人のあずかり知らぬところで「聖点」にこだわっていたわけで、蘇我氏の地盤である盆地南部の聖地と若草伽藍が結びつけられていた。ところが再建法隆寺は、この聖なるラインをずらし、代わりに多武峰を強く意識している。多武峰の談山神社で祀られるのは、蘇我入鹿を殺した中臣（藤原）鎌足で、ここに7世紀の政争の痕跡が浮かび上がってくるのである。



関 裕二

歴史作家、武蔵野学院大学日本総合研究所のスペシャルアカデミックフェロー。著書に『古事記の正体』（新潮新書）、『アマテラスの正体』（新潮新書）など。



所在地
奈良県斑鳩町

絵：佐々木悟郎